**伴伊佐雄君の想い出**

　伴伊佐雄君が亡くなってからもう一年近くになります。彼を偲び、また追悼の意味を持ってこの文を書きます。

　彼と会ったのは勿論私と彼が時習館に入った時からですが、彼は確か一年６組で私は　３組でしたので殆ど知りませんでした。２年７組で一緒になりました。

　勉強の方は良く似たようなもので、余りパットしない方でした。　しかし運動は抜群でサッカーを初めソフトボール、バレーの競技では良く活躍しました。

　少し小柄な彼は余り目立たないような感じですが、実際の競技ではいつも中心的な役割をしていました。頭が少し大きめな感じでした、また手の方も大きく（足は余り記憶にない）末端肥大症では無いかと思うくらいでした。卓球部とのことですが卓球をしたところを見たことはありません。

あの大きな手にかかるとバレーボールの玉が吸い付くような感じで、ソフトボールなどはグローブが無くとも彼の手の中にスポット入り取られる感じでした。

クラスマッチではサードを守り守備のかなめをしていました。ボールを捕る姿勢からファーストに投げる格好は正にチームを引っ張る力を持っていました。

　バレーでは今で言うトスを上げる重要な役目を果たし、スパイクする為のいわゆるセッターをこなし、競技の流れを指導していました。競技者の誰もが彼を信頼し、プレーに専念出来たことはよく知っています。

　サッカーでもボールを維持し、周りの判断よろしく攻めてくる姿は今でもその迫力と共に目に浮かびます。

　いずれの競技に於いても、一途にそのことに集中する精神的なものは優れたものがあり、実社会に出ても優れた仕事をしたようです。

　私がニューヨークに行った時、丁度滞在中で、夜ナイトクラブへ連れて行ってくれました。何やら英語でジョークを言うショウが有りましたが、彼はそれを聞き、自然に理解して笑っていました。　私は何も解らず、さすがだなと感心したことを覚えています。

余談ですが彼を呼ぶのは今でも「伴」と呼び捨てです、伴君、とか伴さんではありません。彼はそう呼び捨てられても、心大きく受け入れるタイプでした。　何故か私のことを「カツナダ」と呼んでいました、どこかで間違えて覚えたのでしょうが、亡くなるまで訂正をしませんでした。彼以外にそう呼ばれたことは有りません。

　あの大きな顔の中の鋭い目とその中に優しさが込められた感じは誰からも慕われ、また強さを持った行動は惹かれるに違い有りません。強い言葉の後に、ニヤッと目を細める仕草には、誰もがその奥にある暖かな気持ちを感じさせるものがありました。

　彼のような強靱な男が死ぬとは信じられない思いですが、人は誰もがその運命から逃れられないことを強く知らしめられた思いです。

（完）